

閨秀詩人席佩蘭の文学：「夫婦能詩」を中心に

蕭, 燕婉
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9639>

出版情報：中国文学論集. 28, pp.102-118, 1999-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

閨秀詩人席佩蘭の文学

——「夫婦能詩」を中心に——

蕭 燕 婉

はじめに

席佩蘭、字は道華、韻芬。江蘇常熟の人で、常熟の孫原湘（一七六〇—一八二八）の妻。孫原湘、席佩蘭の夫婦は共に袁枚の弟子であり、また夫婦ともに詩を詠む「夫婦能詩者」として当時著名であった。

風雅な文学気風に富んだ明清時代には、男性と女性が互いに同気相求め、同声相応ずることが、非常に高く賛美された。例えば、胡文楷の『歴代婦女著作考』¹⁾に見える明末以前の女流詩人に関する記述をはじめ、清代の錢謙益の『列朝詩集小傳』、袁枚の『隨園詩話』などを見ると、伉儷うるわしき「夫婦能詩者」ということが、当時、特に美談として伝えられていたことが分かる。そのことは、大量の女流詩人の輩出に伴って、清代の詩が豪放の氣に乏しいという特徴を生んだだけではなく、また「夫婦能詩」という新たな文学のありかたがそこでは模索されたのではないか、という予測を生むであろう。しかしこの問題に触れたものは、筆者はまだ寡聞にして目賭し得ないものである。

ところで、清の乾嘉時代の閨秀詩人席佩蘭に関しては、すでに合山究氏の「袁枚と女弟子たち」及び王英志氏の「隨園閨中三大知己論略」²⁾で基本的な論及がなされている。そこで、本稿はこれらの論文を踏まえて、まず席佩蘭の生涯について述べ、彼女がいったいどんな夫婦生活を送っていたのかを明らかにしたい。次に、席佩蘭と夫の孫原湘が袁枚に弟子入りした経緯と、交際の実情とを考察したい。また、席佩蘭の詩作は、袁枚の影響を受けている

のは言うまでもないが、さらに、同じ環境で生活していた夫の孫原湘に影響を受けた可能性もかなり高いと思われる。この点に関しては、席佩蘭の『長真閣集』と孫原湘の『天真閣集』との比較を通じて究明していきたい。最後に、以上の検討を通して、「夫婦能詩」という一種の文学のあり方の特色を浮き彫りにしたい。なお「夫婦能詩」の美談が中国文学史においてどのような意義を持つかについても併せて述べたいと思う。

一

中国文学史における「夫婦能詩者」に関する記録を調べてみると、以下のような著名な例を挙げることができる。最も早い時代に「夫婦能詩者」としてよく知られたのは、知見の及ぶ限りでは、恐らく後漢の桓帝時代の秦嘉、徐淑の夫婦であろう。秦嘉が隴西郡の上計掾（會計係）となったとき、妻の徐氏は病気で家に寝たきりで、夫と会って別れを述べることさえできなかった。夫はせめて一目なりともと、迎えの車をよこしたが、妻の容態ははかばかしくなく、車は引き返すはかなかった。夫は沈痛な思いを抑え、愛情にあふれた詩を贈り、妻もそれに答える詩を返した。秦嘉の「婦に贈る」詩三首、徐淑の答詩一首は、ともに『玉臺新詠』巻一にあり、その時夫婦が遣り取りした手紙は『藝文類聚』巻三十二に収められている。後漢以後になると、「夫婦能詩」の例はあまり多くない。時代が降るにつれ、宋代に最も傑出した女詞人李清照は金石書画の愛好者の趙明誠の妻であり、元代の閨秀詩人管道昇は、有名な才子趙孟頫の妻である。そして明代の有名文人で、著書に『升菴集』・『風雅逸篇』・『古今諺』などのある楊慎の妻、黄峨も詩を能くした。明代の大官、戯曲評論家祁彪佳の夫人商景蘭も、名高い閨秀詩人であり、この二人は戯曲小説に因んで「金童玉女」と称されている。また『窃聞』・『續窃聞』・『瓊花鏡』などの著述を残した明末の文人葉紹袁の妻、沈宜修も女流詩人として著名である。なお、清代の袁枚の女弟子の中でも、席佩蘭のほかおよそ七名ぐらゐの閨秀詩人が「夫婦能詩」として著名である。⁵⁾

以上に掲げた例を見れば、記録上から見る限り、宋、元時代以前の「夫婦能詩者」の例は、明、清時代より少ないことが明らかである。そもそも封建中国社会では、女性は一般に文学的教養から隔絶されており、その上、たと

え妻が詩を能くしたとしても、女性の素質や学問よりも、徳性のほうが重視された時代では、文人たちは「夫婦能詩」ということを意識し、好意的に称える必要があまりなかった。それゆえ、女性たちが古典的な規則にのっとって作詩したとして、それに男性文人が共鳴し得るのは、やはり背景に芸術的、情趣的な生き方を尚ぶ雰囲気があり、かつ婦女の聡明、才知が肯定されている時代でなければ不可能なのではないだろうか。

次に、席佩蘭と夫孫原湘の生涯と結婚について説明する。

席佩蘭は中書席寶箴の孫娘である。六人兄弟の長女であり、第二人、妹三人がいた。その生卒年は不明だが、およそ清の乾隆・嘉慶の時代を生きたと推測される。彼女は少時より聡明で、八・九歳の頃にはすでに『毛詩』を読み終え、さらに父から詩集『綠窗詠』を授けられている。結婚後も彼女は『楚辭』・『杜詩』・『唐詩』・『北齊書』などを次々と読み、広闊な知識の領域に踏み込むことで、文学と歴史の中から栄養を吸収した。なお善く蘭を画いた。著作には『長真閣集』詩七卷、詞一卷、がある。

夫君の孫原湘（一七六〇～一八二八）は字は子瀟、号は心青。若年より詩名は高く、善く梅を画いた。彼は乾隆六十年に舉人に及第し、嘉慶十年に進士に合格した。著作に『天真閣集』五十四卷、『外集』六卷がある。また滿洲人の詩人法式善が「三君詠」を作ったことから、孫原湘は舒位・王曇と共に「三君」と並び称された。

さて、席佩蘭と孫原湘はいく結婚したのか。『天真閣集』の序で、孫原湘が「自丙申冬、佩蘭、予に帰してより……」と言っていることから、彼らが乾隆四十一年に結婚したことが分かる。この時、孫原湘は十七歳だった。この二人は文芸の趣味を共有していたので、結婚後は互いに詩詞の創作に切磋琢磨する日々を過した。このように席佩蘭と孫原湘とは意気相通じていたため、その結婚生活は極めて幸福で且つ情趣に溢れたものであったようである。例えば、席佩蘭は『長真閣集』卷三の「夏夜示外」で次のように詠じている。

夜深衣薄露華凝、
夜深く衣薄くして 露華凝り

屢欲催眠恐未應。
屢しば眠りを催さんと欲して 未だ応ぜざるを恐る

恰有天風解人意、
恰も天風の人意を解する有りて

窗前吹滅讀書燈。
窗前 吹滅す 読書の燈

これはいかにも含蓄と思いやりとに溢れた女性らしい作品である。公の爲に私的な人間性が抑圧された封建社会では、夫婦間の和やかな愛情は往々にして破壊される傾向にある。従つてこのようなごく平易な言葉による、閑適なる夫婦生活のリアルな描写は、必ずや人々の心に清新且つ解放的な感覚を与えたに違いない。

一方、孫原湘が夫婦の感情を詠じた詩はどのようなものであつたのか。『天真閣集』巻九には「寄内」と題する律詩があり、そこでは次のように詠われている。

梅蕊香中折柳枝、
梅蕊香中 柳枝を折る

天涯又見絮飛時。
天涯 又 絮の飛ぶを見る時

定勞辛苦調親膳、
定めて辛苦を勞して 親の膳を調えん

應有推敲寄外詩。
応に推敲して 外に寄するの詩有るべし

晩春に独り京師にいた孫原湘にとつて、その寂しさを慰めてくれるのは、妻の詩作よりほかにはなかつたであろう。また、この詩は妻への思慕を吐露すると共に、席佩蘭の慧さと孝順の美德とをうたつたものとも読める。つまり、席佩蘭が夫の敬意と愛慕を得られたのは、単に彼女の才氣煥発たる文学的素養のためだけでなく、更に彼女の奥ゆかしい婦徳のためでもあつたと考えなければならぬのである。

舒位の『瓶水齋詩集』巻十の「雨夜與仲瞿讀子瀟天真閣集、即書其紅豆圖後」の中に「香占夫妻福」という句がある。これは舒位が『天真閣集』を読んで、作品の中に表れた孫・席夫婦の琴瑟相和しているさまに深い印象を受け、その結果自ずと生じた羨慕の気持ちを書いたものと考えられる。また、この詩句の下に「子瀟學詩於閨中」という説明がある。してみると、夫婦円満のゆえんは、二人の作詩の嗜好が一致していることにあると舒位は見ているのだらう。舒位のこのような考え方は、多くの女性が文学の受容者・創作者としての十分な能力を持つにつれて、詩を媒介として男女の心理的交流も活発化し、深められていったことの現われであらう。つまり、女性が文学の才能によって男性文人と結ばれば、夫婦の感情はそれだけ意志の通じ合うものになることである。

一方で、「子瀟學詩於閨中」という言葉からは、席佩蘭の閨房が、書斎の趣味的世界と一体のものであつたことが窺えよう。席佩蘭と孫原湘の二人が壁に書画を掛け、吟味した花を挿し、机に筆・墨・紙・硯を並べているよう

な部屋で、共に勉強している情景を、恐らく舒位は熟知していたものと思われる。

このような高雅な情趣に富んだ夫婦生活の中で、席佩蘭と孫原湘の二人は、共に一首の詩を完成させたこともあった。例えば、『長真閣集』巻四に収められた「燈花聯句和蘊玉樓韻」詩は、第一、二句目と第五、六句目は孫原湘が作ったものであり、第三、四句目と第七、八句目は席佩蘭が書いたものである。こうしてみると、彼らは詩を合作することで、互いに才知を競いあい、両者とも優れた知性と感性を兼ねそなえた充実した気分を十分に味わっていたことを知ることができよう。

以上に検討した内容から、才女と才子が結ばれた家庭では、作詩という共通の趣味があるために、風雅で情趣に溢れた夫婦生活が送られていたばかりでなく、男性を夫婦の情愛に専念させることもできたことが分かる。そして、席佩蘭の『長真閣集』に収められた、外に寄す、外に贈る、或いは外と同じ韻で作られた詩などは併せて三十首を数える。このように頻繁な夫との詩のやり取りは、絶えず彼女の創作衝動を促す有力な刺激であり、また彼女の詩才を磨く好機でもあったと考えられよう。このことは決して見過ごされてはならない。つまり、閨秀詩人と夫（男性文人）との贈答の中から、新たな文学を創作しようとする模索の動きが現れていたと考えられるのである。

二

周知の如く、袁枚の「性靈」を標榜する文学的主張や、精神の自由を尊重する詩風は、当時かなりの人気を博し、一世を風靡していた。『隨園詩話』からもわかるように、彼の門下の弟子や共鳴者は、実に驚くほど多かったのである。当時、この席佩蘭・孫原湘も袁枚の崇拜者であり、二人ともその弟子であった。以下では、この孫氏夫婦がどのような経緯で袁枚の弟子になったのか、またその交際の実情はどうであったのかについて、述べることにする。孫原湘は席佩蘭よりも先に袁枚と出会っている。この初対面について、袁枚は『隨園詩話』巻十一の二十五に、「戊申、虞山を過る。竹橋の太守、六人を薦む。孫子瀟、……皆少年より未だ易からざるの才なり。」と述べている。以上の記述から、袁枚と孫原湘とが初めて会ったのは乾隆五十三年（一七八八）であることが分かる。この時、

袁枚は七十三歳であり、孫原湘は二十九歳であった。二人が面識を得たきっかけは、太守吳蔚光（竹橋）の紹介であった。袁枚は孫原湘と会うと、直ちに彼の佳詩を『隨園詩話』に収録し、「少年未易才」と述べて彼を賛美した。孫原湘が袁枚に弟子入りしたのも、恐らくこの時のことであろう。これ以後、二人は親しくなったようで、乾隆五十七年に孫原湘は袁枚に招かれ、隨園を訪れている。

では席佩蘭は、いつ頃袁枚の面識を得、弟子入りしたのだろうか。『隨園詩話補遺』卷六の十七に、「茲に又、孫子瀟の妻、席佩蘭、字は韻芬なる者を得たり。詩に云々……」とあることから、およそ乾隆五十八か五十九年頃に、袁枚が彼女の詩を入手したことが分かる。乾隆五十九年（一七九四）に席佩蘭はようやく袁枚と会った。彼女が袁枚の面識を得たのは、夫の孫原湘より六年も遅かった。

実は、袁枚は席佩蘭の詩を読んだ際には、「詩才清妙」と一応はその詩才を高く評価したものの、内心では、彼女の詩は孫原湘が代作したものではないかと疑っていた。乾隆五十九年の春、袁枚は自ら虞山の孫氏夫婦の家を訪れた。袁枚が席佩蘭に対して抱いた第一印象は「容貌婀娜」であり、なかなか魅力のある才色兼備の女性だと思っただようである。席佩蘭はこの得がたい機会に乗じて、自分の小型の肖像画を袁枚に呈上し、詩を書いてもらうように頼んだ。袁枚はその肖像画を袖の中に入れ、まず孫原湘と共に吳竹橋太守の家へ行って酒を飲んだ。まだ夕暮れにならないうちに、席佩蘭は早くも三首の律詩を完成させて送ってきた。紙幅の都合上、ここでは「上袁簡齋先生」其の一のみを引くことにする。

慕公名字讀公詩、

公の名字を慕い 公の詩を読み

海内人人望見遲。

海内 人人 望見して遅まつ

青眼獨來幽閣裏、

青眼 独り来る 幽閣の裏

綺衣無奈澣妝時。

綺衣 奈んともする無し 妝を洗うの時

蓬門昨夜文星照、

蓬門 昨夜 文星照らし

嘉客先期喜鵲知。

嘉客 期に先だちて 喜鵲知る

願買杭州絲五色、

願わくは杭州の糸の五色なるを買い

絲絲親自繡袁絲。 絲絲 親自みずか袁絲を繡ぬいわん

そこには、袁枚に詩を学びたいという抑えがたい感情と、深い敬愛の念とを読み取ることができる。袁枚はその三律の秀逸さに驚嘆し、「細膩風光」と賞賛して、夫に劣らぬ彼女の素晴らしい詩才を認めただのである。

しかし、優艶な席佩蘭の肖像画に向かつて、袁枚は自分の年老いたさまに引けめを感じ、なかなか筆を下すことができなかった。そのため、彼はその肖像画を杭州まで携え、孫雲鳳・雲鶴の姉妹に詩を書いてもらうことにした。⁽¹⁴⁾ 孫雲鳳はそこで「題佩蘭女史拈花小照」詩を作った。この詩は『隨園女弟子詩選』巻一に収められている。この面会以後、袁枚が死ぬまでの三年間、席佩蘭と袁枚との詩的交際はずっと続いたのである。

翌年（乾隆六十年）の上巳の日、袁枚は再び孫原湘の家を訪れた。この訪問に関しては、『天真閣集』巻九に「喜隨園先生至」があり、また『長真閣集』巻三には「上巳日隨園先生來虞、敬呈二律」の詩が残されている。

同乾隆六十年、袁枚は八十歳の誕生日を迎えた。彼は自ら「八十自壽」詩を書いたが、またこの詩を席佩蘭に示し、同じ韻を使って詩を作るように命じた。⁽¹⁵⁾ のちに、席佩蘭は「和隨園自壽十章」詩を完成し、手紙を附して、袁枚に送った。その手紙の内容は、まず詩作を完成するまでの様々な辛苦を語っているが、注目すべきは、その手紙の末尾で次のように述べられていることである。⁽¹⁶⁾

冊尾附錄近著數章、并希嚴削、……『詩話』自七卷以下、專望寄賜。

冊尾に近著の數章を附録す、并せて嚴削を希う。……『詩話』七卷より以下は、専ら寄賜を望む。

つまり、席佩蘭は袁枚との詩のやり取りの中で、袁枚に自分の詩の厳しい添削を頼んだり、袁枚の著作を貰ったりなどしてして、自ら進んで研鑽に励んだのである。残念なことに、袁枚の添削した後の詩稿は、今日見ることができない。しかし、このようなことから、創作において絶えず進歩しようとする席佩蘭の強烈な学習意欲を窺うことができよう。

その後、袁枚は彼女の作った「和隨園自壽十章」を得て読み、並々ならぬ評価をしたようで、「詩を以て本朝に冠たり」とまで言って、彼女を励ましたのである。恐らくこの時になると、袁枚の内心中では、多くの女弟子の中でも、詩では席佩蘭が最高の地位を占めることになったと考えてもよいであろう。

同乾隆六十年、孫原湘は郷試に第二名で及第した。『隨園詩話補遺』卷九の四十三に、袁枚は「今科の第二名は、余の詩弟子なり。」と述べている。これは、袁枚自身が孫原湘との師弟関係を、その著作において明確に述べたものである。

更に翌年（嘉慶元年）の冬、袁枚は三度目に孫氏の家を訪れた。その時、彼は完成した『隨園女弟子詩選』を携えており、席佩蘭にこれを示している。そして、袁枚は家に帰る前に、孫原湘と共に友人の家で酒を飲んだ。酒宴の楽しい雰囲気の中で、袁枚は孫原湘に「戯れて己未の同年を以て相期し」たのである。もちろん、それは袁枚の戲言だとはいうものの、そこには孫原湘を激励しようとする袁枚の苦心を窺うことができる。なぜなら、そもそも袁枚は早く乾隆四年（己未年）に進士に及第していた。したがって、すでに郷試に合格していた弟子孫原湘が、もし嘉慶四年（己未年）に進士に及第すれば、彼は袁枚より六十年後の同年ということになる。そうならば、袁枚にとって、いかに嬉しいことであつたらうか。以上から、袁枚が孫原湘を相当に重視し、彼に大いに期待を寄せていたことが知ることができよう。如何せん袁枚は嘉慶二年に亡くなり、孫原湘は嘉慶十年によりやく進士に及第した。故に、袁枚のこの師弟同年という願望は叶わなかつたのである。

因みに、孫原湘の『天真閣集』は嘉慶五年に出版された。席佩蘭の『長真閣集』は『天真閣集』の後に付されて、嘉慶十七年に刊行された。長真閣とは孫氏の書斎の名前である。袁枚は、生前にすでに『長真閣集』に題辞を書き与え、

字字出於性靈、不捨古人牙慧、而能天機清妙、音節琮琤。似此詩才、不獨閨閣中罕有其儷也。其佳處總在先有作意、而後有詩、今之號稱詩家者愧矣。

字字、性靈より出で、古人の牙慧を捨わずして、能く天機清妙にして、音節琮琤たり。此の似きの詩才は、獨り閨閣の中に罕に其の儷有るのみならず。其の佳なる処は、総て先ず作意有りて、而る後に詩有るに在り。今の詩家と号稱する者は愧ぢん。

と述べている。このような評価は、多少過褒溢美の辞であるという印象を受けるかもしれないが、『長真閣集』を読む限りでは、袁枚の衆多の女弟子たちの中で彼女は一頭地を抜いており、その優れた詩才によって注目され、し

かも各体の詩にも長じていたのは確かであろう。

以上、席佩蘭、孫原湘夫妻と袁枚との交際の実態を検討してきたが、袁枚が晩年にこの夫婦のことを極めて大切に扱っていたことは言うまでもないだろう。

ところで、乾隆五十五年・乾隆五十七年に、袁枚は女弟子たちを集めて有名な西湖詩会を開催しているが、実は席佩蘭は一度もこれに出席していない。それにもかかわらず、夫が袁枚の詩弟子だったので、袁枚が孫原湘の家を訪れた機会を利用して、席佩蘭は生涯に三度も袁枚と会い、親しく交際することができた。つまり、彼女は確かに夫のおかげで、より容易に師の袁枚と知り合うことができたのである。したがって、才子たる夫の援助と励ましによってこそ、閨秀詩人の視野は広げられ、またその詩才を發揮する機会や場所も、より多く与えられたのだと考えられよう。

三

前述したように、袁枚は初め席佩蘭の詩作は孫原湘が代作したのではないかと疑っていた。では、なぜ彼女の詩は、袁枚にそのような印象を与えたのか。実は席佩蘭が優秀な詩才の持ち主であることは、すでに疑いのない事実であった。したがって、恐らく袁枚は、それとなしに席佩蘭の詩には孫原湘の詩とある種の類似性がある、或いは同じ雲田気を持つ、といったことを漏らしたのではなかったのかと思われる。いったい席佩蘭の創作は孫原湘に影響されていたのかどうか、そのことを検討してみよう。まず二人の詩作の題目を比較してみると、次のような結果になる。

(数字は巻数を示す。●印の十首は席佩蘭が夫に連れられて山西の義父の官署へ行き、そこで二年間を過した時の作であることを示し、★印の九首は題画詩であることを示す。特に印のない残りの三十二首は、彼らの生活の中で、記録に値する出来事と感銘とをうたったものである。)

天眞閣集		長眞閣集		天眞閣集		長眞閣集	
2 古意	1 古意	2 渡江	1 渡江	1 除夕	1 德風亭	1 上太行	1 上太行
2 曲卓	1 曲卓	2 太行	2 太行	1 七夕	1 七夕寄外書	1 七夕寄外書	1 七夕寄外書
2 曉行觀日出	1 曉行觀日出狀	2 登德風亭	2 登德風亭	1 三橋春遊曲	1 三橋春遊曲並序	1 三橋春遊曲並序	1 三橋春遊曲並序
2 將之京師次內韻	1 送外之京兆	2 并州除夕	2 并州除夕	2 丁香	2 丁香	2 丁香	2 丁香
5 雁	1 聞雁	1 三橋春遊曲和竹橋丈韻十六首	1 三橋春遊曲和竹橋丈韻十六首	2 題花卉冊子	2 題花卉冊子	2 題花卉冊子	2 題花卉冊子
2 留題上黨郡署壁	1 南歸日題上黨郡署壁	17 白丁香	17 白丁香	2 斷腸辭	2 斷腸辭	2 斷腸辭	2 斷腸辭
3 題畫	1 題畫	4 耕虞花卉冊子	4 耕虞花卉冊子	3 上巳日隨園先生來虞	3 上巳日隨園先生來虞	3 上巳日隨園先生來虞	3 上巳日隨園先生來虞
4 赴金陵作	2 丙午報罷慰夫子	6 重午哭阿安	6 重午哭阿安	3 岳祠銅爵	3 岳祠銅爵	3 岳祠銅爵	3 岳祠銅爵
4 書馮仲廉所撰項列婦傳後	2 題項列婦飲冰集	9 姪婦謝氏歸自清楓涇 饋雪瓜二十枚	9 姪婦謝氏歸自清楓涇 饋雪瓜二十枚	3 送姪婦謝翠霞歸寧楓涇	3 送姪婦謝翠霞歸寧楓涇	3 送姪婦謝翠霞歸寧楓涇	3 送姪婦謝翠霞歸寧楓涇
16 題美人冊子	2 題美人冊子	7 春草	7 春草	3 春草	3 春草	3 春草	3 春草
9 莫愁湖權歌	3 莫愁湖權歌十首和江寧太守李松雲	9 寄壽隨園先生	9 寄壽隨園先生	3 壽簡齋先生	3 壽簡齋先生	3 壽簡齋先生	3 壽簡齋先生
9 入都留別	3 送外入都	7 黃鶯探	7 黃鶯探	3 讀吳節母傳書	3 讀吳節母傳書	3 讀吳節母傳書	3 讀吳節母傳書
10 碧紗厨歌	3 碧紗厨歌	9 新年雪	9 新年雪	3 閨花朝	3 閨花朝	3 閨花朝	3 閨花朝
5 賣花聲	3 賣花家	8 消夏雜詩	8 消夏雜詩	3 丙辰消夏詩	3 丙辰消夏詩	3 丙辰消夏詩	3 丙辰消夏詩
3 十四夜月	3 十四夜月	10 聽雨	10 聽雨	4 聽雨	4 聽雨	4 聽雨	4 聽雨
17 春榜放後作	3 賀外省試報捷	10 虎邱看月圖	10 虎邱看月圖	4 虎山看月圖為李松雲太守作	4 虎山看月圖為李松雲太守作	4 虎山看月圖為李松雲太守作	4 虎山看月圖為李松雲太守作
『外集』卷1內人指甲	3 以指甲贈外	13 狎鷗軒校書齋	13 狎鷗軒校書齋	4 狎鷗校書圖	4 狎鷗校書圖	4 狎鷗校書圖	4 狎鷗校書圖
16 情箴七首	3 情箴為夫子作	12 王蘭泉司寇得先人墓田	12 王蘭泉司寇得先人墓田	4 王述菴司寇靈芝圖	4 王述菴司寇靈芝圖	4 王述菴司寇靈芝圖	4 王述菴司寇靈芝圖
30 靜坐箴	3 靜坐	14 蘭泉覓句圖	14 蘭泉覓句圖	5 歸佩珊蘭泉覓句圖	5 歸佩珊蘭泉覓句圖	5 歸佩珊蘭泉覓句圖	5 歸佩珊蘭泉覓句圖
10 隨園先生過訪同飲吳氏光霽堂	4 冬日隨園先生來虞，並示所刻女弟子詩選	19 錢牧齋故宅吊柳夫人	19 錢牧齋故宅吊柳夫人	6 錢尚書故宅吊柳夫人	6 錢尚書故宅吊柳夫人	6 錢尚書故宅吊柳夫人	6 錢尚書故宅吊柳夫人
11 西瓜燈	4 西瓜箴和宛仙韻二首	7 吳松厓秀才	7 吳松厓秀才	7 吳松厓秀才	7 吳松厓秀才	7 吳松厓秀才	7 吳松厓秀才
13 黃貞女	5 黃貞女挽詩	19 同心哀哭子偁	19 同心哀哭子偁	6 哭子偁弟	6 哭子偁弟	6 哭子偁弟	6 哭子偁弟
13 無錫慧山下，唐氏女矢志不嫁	5 書唐孝女傳後	21 吳松厓秀才	21 吳松厓秀才	7 吳松厓秀才	7 吳松厓秀才	7 吳松厓秀才	7 吳松厓秀才
18 仲春望日偕內子道華為武林之遊	6 將為武林之遊 舟中得詩						
21 伯生先生行秋圖	7 伯生屬題行秋圖						

閨秀詩人席佩蘭の文学 (蕭)

右に掲げた資料によると、『長真閣集』と『天真閣集』において、詩題の類似した詩は全部で五十一首存在する。恐らく彼らは屢々同じ詩題を擬し、作詩していたのであろう。このことから、夫婦二人が共有した文芸活動の頻度が高かったことが窺える。より具体的な例を見るなら、『天真閣集』巻十の「聽雨」に孫原湘は、

凄凄浙浙復冷冷、不種芭蕉自可聽。小閣轉生心寂歷、疏簾都化霧濛冥。
十年舊事燈如夢、一夜寒柯鳥亦醒。望斷美人天未遠、幾多清語付簾鈴。

と詠じている。そして、席佩蘭は夫と似た詩題で、同じく聽・冥・醒・鈴という韻を使って、ほぼ同時に詩を完成した。彼女は『長真閣集』巻四の「聽雨同子瀟作和宛仙韻」において次のように詠っている。

潤蘊香篝冷畫屏、燭花黯黯隔窗聽。此間竹樹原蕭颯、今夕房櫳易晦冥。

乍著微寒先怕病、本無秋夢莫言醒。有何情事偏相絮、階下蛩聲屋上鈴。

しかし、単に類似した題材の詩が多いことのみから、席佩蘭の詩作が夫に影響を受けたと、簡単に判断を下すことはできない。したがって、この問題については、資料によって裏付け得る範囲内で、できるだけ掘り下げて追究していきたい。

実は席佩蘭は「和隨園先生自壽十章」詩を書き上げる前に、ちょうど夫が試験のために京師に行っていたので、「商榷無人、擲管屢駁」(商榷するに人無く、管を擲ること屢しば駁む。)という状況を吐露している。この言葉から、彼女はその作詩に際して、夫に依頼する心が少なくなかったことが窺えよう。言い換えれば、彼女にとって夫とは、詩文創作に際しての最も良き相談相手であり、かつ指導者でもあったのであろう。したがって、日々の中での彼女の詩が、おのずと孫原湘の詩とある類似性を持つようになったということは、想像に難くない。

例えば、『天真閣集』巻三の律詩「十四日夜」で、孫原湘は次のように詠じている。

明夜團圞亦可喜、圓極翻憂闕從起、世間萬事莫太圓、請君仰首看月明。

そして『長真閣集』巻三の律詩「十四日夜」で、席佩蘭は次のように詠じている。

天無表裏皆澄澈、月在中間是性靈、萬事將圓未圓好、此情須說素娥聽。

この席佩蘭の詩を見ると、傍線部「万事 將に円かならず」として 未だ円好ならず」は、孫原湘の傍線部「世間の

万事は 太だ円かなること莫し」を模倣したものであり、また最終句「此の情 須らく素娥に説きて聴かしむべし」の着想も、恐らく夫の結句「請う君 仰首して 月の明るきを看よ」に拠ったものである。しかし、これは単なる模倣ではない。夫の詩の表現を生かしつつも、清麗優美な芸術形象を創作し、心の奥深くにある感銘を精緻に伝えようとしているのである。恐らく、袁枚も彼女の挽骨奪胎を見抜いていたのであろう。要するに、席佩蘭の文学は概ね袁枚の主張した詩論を継承しつつも、夫の存在を大きな心の支えとしており、この恰好の融合が、彼女独自の文学を完成する上でも不可欠な下地となったのである。

さらに注目されるのは、取上げた五十一首の詩の中で、「題畫詩」に属する詩は九首あるが、その画を描いたのは、概ね当時の著名文人であり、また孫原湘の友人でもあった。つまり、夫の交遊範囲が広がるにつれて、席佩蘭の創作内容は次第に豊富になったと考えられるのである。また、席佩蘭は優秀な閨秀詩人なので、彼女の詩作が常に夫の友人層の間で広く読まれていたことは間違いないと思われる。孫原湘の友人王曇は『煙霞萬古樓詩選』巻二の「寄歸佩珊夫人、兼柬奉長真閣内史席道華夫人、並示内子」詩の説明において、次のように記している。

憶六、七年前、虞山孫子瀟書來、謂長真閣内史席道華夫人、欲與内子相見虎邱而不果、舊年虞山元旦、曇見道華於長真閣下、時内子在西湖、即欲爲兩夫人作虞山清曠圖而有所待。今年元日、重繹兩夫人詩、如雲璈仙奏、因屬内子爲三逸圖。

憶う、六、七年前、虞山の孫子瀟より書來り、長真閣内史席道華夫人、内子と虎邱に相見えんと欲するも果さずと謂う。旧年、虞山の元旦に、曇、道華に長真閣下に見ゆるも、時に内子、西湖に在り。即ち兩夫人の為に虞山清曠図を作りて待つ所有らんと欲す。今年の元日、重ねて兩夫人の詩を繹ぬるに、雲璈の仙奏の如し。因りて内子に属して三逸図を爲さしむ。

この記述によると、席佩蘭と夫の友人王曇の間には、読者及び批評者としての関係が成立していたことが分かる。そもそも当時の男性文人は、女性の作品に高い興味を有していた。そこで、男性文人との交友やその声援は、おのずと才女の発展を促す一つの主たる要因となっていた。さらに、以上の記述によると、席佩蘭は王曇の妻と会おうとして連絡をとっているが、これは彼女が、自ら進んで閨秀たちの友誼を結ぶために努力していたという事実をも

示すものである。最後に王曇の妻は「三逸圖」を描いて、当時の才女たちの風雅な文芸活動の盛況について、記念に値する画を残した。「三逸圖」が描かれたことも、「三逸圖」の内容そのものも、いずれも才女たちが文芸創作において互いに支え合い、援助し合おうとした熱情の表われなのである。そのことも、彼女らの高められた創作欲を表現し尽くそうとする態度の表われと見なされよう。

夫や夫の友人たちの支えによって、席佩蘭の詩作に対する自信は大変強くなったようである。なぜなら、彼女は「寄蔣伯生」詩において「……我才敢與古人抗、我志還凌古人上、漱玉猶嫌有累辭、斷腸每惜非高唱。」（……我が才、敢て古人と抗し、我が志、還つて古人の上に凌ぐ、漱玉も猶お累辭有るを嫌い、斷腸も毎に高唱に非ざるを惜しむ。）と詠じているからである。「漱玉詞」は、宋代の最も傑出した女流作家李清照の作品集であり、『斷腸詞』は、同じく宋代の優れた才女朱淑真の作品名である。この素晴らしい二人の女流詩人の著作にすら不満を抱く態度からは、詩学の才能と実力によって、何が何でも前人を凌駕しようとする席佩蘭の意気軒昂なさまを窺知することができよう。

おわりに

以上、席佩蘭と孫原湘夫妻の文芸生活について検討してきたが、我々はこれによって、「夫婦能詩」という明清時代における文学のありかたの特色を理解することができるだろう。夫婦共に文学素養がある場合には、感情の上でも文学の上でも、互いに支え合う働きがある。そして、席佩蘭の例からわかるように、夫の伴侶としての役割を果たした妻は、まさに夫の行動及び創作の模倣を通して、より深くかつ広い文学的空間を自らのものとして、独自の文学を自由に展開するに至ったのである。

前述したように、席佩蘭の『長真閣集』と孫原湘の『天真閣集』を比較した結果からは、彼女の創作が、夫の孫原湘に大いに影響を受けたことが分かる。そもそも席佩蘭は袁枚と会う前から、すでに詩を能くし、しかも詩名はすでに遠く伝わっていた。⁽²²⁾そのため、席佩蘭の生涯のうちで、袁枚と会った回数⁽²³⁾は三回にも達しているとは言うも

の、あらゆる彼女の創作の源泉や靈感が、袁枚から得られたものとは軽々には言い難い。要するに、彼女が夫、或いはほかの閨秀詩人から得た実際上の影響や援助は、袁枚よりも多かったのである。またこういった事實は、私の知る範囲では、「夫婦能詩」として取上げた袁枚の他の二人の女弟子にも共通している。そのひとは鮑之蕙である。彼女の詩集『清娛閣詩鈔』²³を調べてみると、夫と共に創作した作品がかなり多いことは明らかである。もうひとは潘素心である。潘素心が編集した『平西唱和集』と『城東唱和集』は、彼女の生涯にわたる閨秀詩人たちの唱和の作品集なのである。したがって、彼女らのすぐれた創作が、専ら袁枚から有力な指導を得ていたとは容易には言えないと思う。

清代の閨秀詩人駱綺蘭は『聽秋館閨中同人集』の序において「至閨秀幸而配風雅之士、相爲唱和、自必愛惜而流傳之、不至泯滅。」（閨秀、幸いにして風雅の士に配するに至れば、相唱和を爲し、自ら必ず愛惜して之を流伝し、泯滅するに至らず。）と述べている。²⁴ここには、文学素養の高い夫がいるおかげで、閨秀詩人の詩名もより速くまで伝わり、詩作の才能も養成されやすかったという実情が、再び明白に示されている。一方、このことは、当時の女性が文学に携わる時、常にその周囲に、それを支える男性文人の姿があったという事実を反映しているように思う。

ところで、この「夫婦能詩」の美談は、中国文学史においてどのような意味を持つのだろうか。清の乾嘉期の文学は、長く続いた平和な社会の中で、豊かな経済をバックに知識人や庶民も参加し、隆盛を極めた。そのため、詩の世界では華々しい創作活動が行われ、多数の有名・無名の詩人を輩出し、特に江南地帯では独自の文化が華開いた。そして、文化が爛熟の極に達するにつれて、精神の自由を尊ぶ思想が高まり、文人たちは悠然と琴、棋、書、画などといった趣味生活に陶醉するようになった。一方、恰も明末以後、女子教育の普及などによって、詩才に富んだ才女たちが数多く現われるようになったが、彼女らもやはり芸術的な生活を追究しようとしたのである。したがって、あらゆる面で生活の芸術化を計り、情性の解放を要求していた社会的思潮の中で、夫婦が互いに詩友として詩を作り合い、時に理想の異性として愛慕し合うといった関係が、特に生き生きと息づくことになったのである。故に「夫婦能詩」ということが屢々美談として伝えられるのは、明末清初に醸成されてきた女性尊重の思潮、及び

情を重んじる思潮の具体的な表われだと考えられる。実は、「夫婦能詩」のみではなく、清の蔣寶齡撰の『墨林今話』を読めば「夫婦能畫」の例の多いことも、清代に入るとななら珍しいことではなくなる。要するに、文芸の領域で語られずにはいない優秀な女性の存在は、この時代の文化的特徴を示すものであろう。

既に言及した通り、席佩蘭の文学は、主に孫原湘・袁枚という文人の文学様式と思想とを受容しつつ充実してきたのであるが、では彼女の詩作の特色、及び彼女の清代女流文学史における位置づけはどのようなものであろうか。これらの問題については、彼女の詩を取り上げて、より一層の研究を行う必要があると思われる。この点に関しては、稿を改めて述べてみたい。

注

(1) 『歴代婦女著作考』一九八五年 上海古籍出版社。

(2) 『歴代婦女著作考』に見える清代以前の「夫婦能詩者」の例は以下の通りである。後漢では徐淑、秦嘉の妻。著に『徐淑集』一卷がある。宋代では史琰、張子履の妻。著に『和鳴集』一卷がある。莫氏、胡宗伋の妻。著に『賢訓篇』一卷がある。魏玩、曾布の妻。著に『魏夫人集』がある。元代では管道昇、趙孟頫の妻。著に『墨竹譜』一卷がある。鄭允端、施伯仁の妻。著に『肅謹集』一卷がある。明代では王鳳嫺、張本嘉の妻。著に『焚餘草』三卷がある。沈宜修、葉紹袁の妻。著に『鸚吹集』二卷がある。商景蘭、祁彪佳の妻。著に『錦囊集』一卷がある。黃峨、楊慎の妻。著に『楊狀元妻詩集』がある。鄧太妙、文翔青の妻。著に『三出西郊集』がある。また『列朝詩集小傳』閩集には、韓安人屈氏・林姪・沈氏宛君・文太青武氏という夫婦能詩の例が見える。『隨園詩話』に見える、夫婦共に詩を能くするという記述は、以下の通りである。『隨園詩話』卷十一の一・卷十六の四十三。『隨園詩話補遺』卷一の六十二・卷三の二十一・卷四の五十二・卷五の五十四・卷六の三・卷六の十七・卷七の三十三・卷八の十九・卷八の六十五・卷十の三十四。

(3) 台山究氏は「清代詩人と女弟子」において「清代の詩に、男性的な雄邁豪毅な氣象が乏しいのは単に政治的圧迫や社

会的閉塞状況によるのみでなく、この時代に現われた女流詩人のもつ女性特有の繊弱優美な感覚が、この時代の文学情調を形造る上にあずかって力があつたからだと考えられる。」と指摘する。(『中国詩人論岡村繁教授退官記念論集』汲古書院・一九八六年出版、頁七八一〜八〇五)

(4) 台山究氏の論文は『文学論輯』第三十一号所収。王英志氏の論文は『文学遺産』一九九五年第四期所収。

(5) その七名とは陳長生・鮑之蕙・屈秉筠・吳瓊仙・潘素心・吳柔之・張允滋である。

(6) 『長真閣集』巻一「思親」に席佩蘭は「十五年無一日離、那堪睽隔兩旬期、昨宵枕上思親淚、猶夢牽衣泣別時」と詠じている。この詩に描写されているのはまだ実家の両親を恋慕している幼な妻の心情だと考えられる。これによると、恐らく結婚した時に彼女は十五歳だったと推測できよう。もしそうだとすれば、席佩蘭は孫原湘より二歳年下で、乾隆二十七年生まれである。そして『長真閣集』は嘉慶十七年に出版されたから、彼女はその時まだ生きていたと思われる。

(7) 『長真閣集』巻五の「表兄屈元安手書先姑母綠窗遺稿、……謹識其後」に「余生八九齡、初讀毛詩竟、先君授一編、題曰綠窗詠」とある。

(8) 『長真閣集』巻五の「紅蕙圖」に「讀罷離騷愁獨醒」と。同巻一に「讀杜少陵入蜀詩」があり、同巻三の「中秋待月詞和宛仙韻」に「唐詩繙盡二更餘」と。また同巻三に「讀北齊書」がある。

(9) 使用したテキストは嘉慶十七年刊本。

(10) 使用したテキストは嘉慶五年刊本。

(11) 『長真閣集』巻六「哭子偁弟」に「姐姐相愛深、奇文共研推」とある。

(12) 『天真閣集』巻八に「題隨園壁」と「隨園先生招集上下江名士張燈設宴即事四首」がある。

(13) 『隨園詩話補遺』巻八の十一に「女弟子席佩蘭、詩才清妙、余嘗疑是郎君孫子瀟代作。……」とある。

(14) 以上の事蹟は『隨園詩話補遺』巻八の十一による。

(15) 袁枚の「八十自壽」は『小倉山房詩集』巻三十六に収められている。

(16) 『續同人集』閨秀類に収められている席佩蘭の「又與隨園書」による。

閨秀詩人席佩蘭の文学(蕭)

- (17) 『長真閣集』卷三「以詩壽隨園先生蒙束縑之報且以詩冠 本朝一語相勗、何敢當也、再呈此篇」詩による。
- (18) 『長真閣集』卷四「冬日喜隨園先生來虞、并示所刻女弟子詩選、以佩蘭居首、敬呈二律」詩による。
- (19) 『天真閣集』卷十「隨園先生過訪、同飲吳氏光霽堂、即送之郡」詩に「公戲以己未同年相期」という注がある。
- (20) 『續同人集』閨秀類に収められる席佩蘭の「又與隨園書」による。
- (21) この詩は『長真閣集』に収められていないが、『清詩紀事』卷二十二による。
- (22) 『天真閣集』卷二十四「内子名佩蘭、……蘭閨三友歌」詩に「風吹詩香滿縣聞」と。
- (23) 『清娛閣詩鈔』は『京江鮑氏三女史詩鈔』(光緒四年刊)所収。
- (24) 『平西唱和集』と『城東唱和集』は嘉慶十三年刊。(胡文楷の『歷代婦女著作考』に収められている。また同書によると、洗玉清は『廣東女子藝文考』の序においても類似した発言をしている。「就人事而言、則作者之成名、大抵有賴於三者。其一名父之女、……。其二才士之妻、閨房倡和、有夫婿爲之點綴、即聲氣易通。其三令子之母、……。駱綺蘭の詩と生涯については、拙稿「閨秀詩人駱綺蘭小伝——清乾隆期における一婦人の生き方——」(『九州中國學會報』第三十七卷、平成十一年)参照。